

3大学合同視察とワークショップ

9月5日、奈良県立大学（麻生ゼミ）、愛知県の椋山女学園大学（角本ゼミ）が石巻を訪れ、石巻専修大学（丸岡ゼミ・庄子ゼミ）との3大学4ゼミ合同の地域視察とワークショップが行われました。

午前中は、麻生ゼミ一行と丸岡ゼミ・庄子ゼミが石巻の視察をしました。最初は、日和山にある鹿島御児神社の鳥居から石巻の海沿いを眺めました。広い空き地の中で一軒だけポツリと家が建っていました。一軒だけ取り壊されずにいるのが不思議でしたが、家主や相続権者が不明の場合、行政も処分できない、という一般事情を先生から教わりました。

次に、日和山を降りて旧門脇小学校に行きました。旧門脇小学校校舎は現在使われておらず、残すか取り壊すかの議論になっています。この点について奈良県立大学の学生から意見を聞きました。保存すべきという意見が多数でした。案内側から、地元では震災のことを忘れたいため解体を望む声が強いかことや、現在計画されている復興祈念公園に校舎の一部を移設展示する、というゼミの先輩の意見の紹介がありました。

さらに、宮城エクスプレス(株)の「明日のためのミュージアム」を視察しました。同社津波対策ビル5階には、石巻の新聞や被災地の写真資料があり、石巻の被害の大きさを来訪した皆さんに知ってもらえたと思います。展示の中には、石巻専修大学の資料もあり、本学の被災地での活動も伝わったと思います。視察の最後に、同社代表取締役の宇都宮博行氏の被災体験を聞かせていただきました。

被災地の現状を目の当たりにした奈良県立大学の皆さんは、被災地の実情を学ぼうと一生懸命に向き合っていました。視察を通して、改めて石巻の甚大な被害と、来訪者の多くが震災復興について考えてくれていることが分かりました。

午後には、椋山女学園大学の角本ゼミと合流し、石巻専修大学2号館でワークショップを行いました。ここでは、各ゼミの活動報告を行いました。麻生ゼミは奈良県で試みている婚活イベント「寺社コン」、角本ゼミはビジネスコンテストの模様等、庄子ゼミは青森県でのダンスを活用したまちづくりへの取り組みの様子を紹介しました。私たちのゼミでは、私が作成中の卒業論文のテーマ「ジャニーズの経済効果」を紹介し、丸岡先生がコスタリカ出張の概要を報告しました。

参加した学生方は各ゼミの活動報告にしっかりと耳を傾けて聞いていました。

今回の合同ワークショップを通して、「人との関わり一つひとつが凄く大きいもの」と感じました。麻生ゼミと角本ゼミの方々は、とても良い人たちばかりで、出会いに恵まれたなと感じました。これからもこうした交流を通して石巻の震災の現状を伝えていきたいと考えています。

震災3年半後の川開き祭り

7月31日、8月1日の2日間、2014年の川開き祭りが開催されました。

石巻の川開き祭りの由来は、江戸時代に北上川の治水工事を行い、現在の石巻の発展の基礎を築いた川村孫兵衛翁を称え、水難事故で亡くなった方の霊を弔うことです。今では約3年半前の3月11日に発生した東日本大震災犠牲者の慰霊を主な目的として、規模を縮小して開催されています。今年、震災の犠牲になった方々の御霊を弔うため、5,000個の燈籠が旧北上川に流されました。

川開き祭りでは、会場ごとに様々なイベントが行われます。水上では孫兵衛船競漕とミニ孫兵衛船競漕が行われました。昭和50年に始まった孫兵衛船競漕は、今や水上のメインイベントです。

全長12mの船を14名で漕ぎ、舵取り1名、応援2名の計17名が1チームとなり800mのコースで競います。また平成5年からミニ孫兵衛船競漕はより小さなサイズの船に、漕ぎ6名、舵取り1名、応援1名、計8名の小編成で400mのコースです。

陸上のイベントではみこしパレード、大漁踊り、大綱引き大会などがありました。

私は石巻専修大学の生徒として大綱引き大会に参加しました。一般のチームは17チーム出場し、小学生の部は9チームが出場しました。2本先取したほうが勝利するトーナメント方式でした。私たちは2回戦で負けてしまいました。綱引きに力を入れているチームは綱を引く体制やかけ声や気合いから違っており、力の差を感じました。

優勝は圧倒的な力を見せた伊藤製鉄所でした。

祭りの最後を飾る花火は2日間で6,000発を数え、ミニフェニックスやスターメイン等が北上川の夜空を染め、幻想的な光景を作り上げました。

私は初めて川開き祭りに参加し、石巻の祭りがどのようなものなのか感じる事ができました。子供から大人まで、参加したり、見たり、誰でも楽しめるイベントが多く存在し町に地域にあった祭りだと感じました。

川開き祭りのテーマとして「復興への祈りを込めて」というものがあり、多くの人が楽しめ、震災によって亡くなられた方々を弔うこの祭りは石巻にとって大切な祭りだと感じました。

(涌井翔太)

(阪口卓也)

ツール・ド・東北2014

9月14日、東日本大震災で被災した宮城県沿岸部を舞台に長距離の自転車イベント「ツール・ド・東北2014」が開催されました。河北新報社、ヤフーの主催で去年に引き続き二回目の開催です。

石巻専修大学発着で、気仙沼フォンド(220^{キロ})、南三陸フォンド(170^{キロ})、北上フォンド(100^{キロ})、女川、雄勝フォンド(60^{キロ})の4コースを約2,800人が順位やタイムを競わない「ファンライド方式」で走りました。

このイベントにはメディアの注目が集まる個性的な著名人が参加していました。『河北新報』オンラインニュース(9月15日)等によると、著名人の走りは次のようなものでした。

キャロライン・ケネディ駐日米大使は復興目的の公務で出場しました。大使は女川・雄勝フォンド(60キロ)を完走。「大きな力と勇気をもたらした。来年また挑戦するならば、100キロね」と笑顔で語りました。

大会の広報大使の道端カレンさんは昨年に続く参加で最長の「気仙沼フォンド」を12時間近くかけ完走。道端さんは「がれきがなくなり、道路の復旧も進み、東日本大震災からの復旧を感じる一方で仮設住宅がいまだ多く残っている」としました。

障がいのある方向けに今回はじめて「パラサイクリングプロジェクト」が進められ、7名の参加がありました。アテネ、ロンドン、北京のパラリンピック陸上選手で気仙沼出身の佐藤真海さんは、女川町から石巻専修大までの約20キロに参加し、ロンドンパラリンピック自転車銅メダリストの藤田征樹さんとともに走りました。佐藤さんは「仮設住宅は減ってないが、沿岸にアパートが建ち始め…復興は進んでいる」と語りました。

休憩ポイントでは地元住民による手料理などが提供されました。「ようこそ気仙沼」では地元産のサンマ煮付け入り弁当、気仙沼市の蔵内漁港ではワカメまんじゅうやみそ汁、石巻市雄勝町では早朝に水揚げしたホタテの鉄板焼きなど、その土地の味覚を楽しみながら地元の人たちと参加者が交流しました。

13、14日、私たちが通う発着点の石巻専修大学には参加者だけでなく一般の方向けにも、フードエリア10店の屋台が出されました。「サバだしラーメン」やあなご丼、サンマ焼きが販売されました。また、子供たちのために「ポケモン」ショーやワークショップ「ピカチュウと一緒に遊ぼう」が行われました。

ウェブサイト『電通報』によると、サントリーホールディングスの「サントリー東北サンさんプロジェクト」のブースでは、参加者にスタート時の写真を掲載した『河北新報』特別版が配布されました。東北復興支援に向けた取り組みのパネル紹介や、復興に向けたメッセージをタブレット端末で書き込んでもらうデジタル「復興横断幕」への書き込みを促す企画も行われました。

「ツール…」は、とてもいいイベントだと思います。日本全国、海外から多くの方が訪れてくれることで、被災地の復興状況をわかってほしいものです。経済効果も生まれますし、何より交流から、宮城の人たちはいい刺激を受けることでしょう。10年・20年続けてほしいですし、自分も参加してみたいと思いました。

(大瀧裕也、三國翼)

「ツール・ド・東北」参加者の声

「ツール・ド・東北2014」はサイクリストたちに三陸の大自然の中を走りながら被災地の今を感じてもらえるイベントです。4種類のコースは自転車上級者から初心者まで、誰でも安心して参加できる方式です。

私は当初、北上フォンド100キロに挑戦しましたが、途中で体力の限界を感じ、女川、雄勝の60キロにコースを変更してやっとゴールインしました。この距離の長さは、走ってみたいと実感できません。

コースの途中ではいくつかの「エイドステーション」と呼ばれる休憩所があり、地域毎の特色を生かしたおもてなしが行われていました。女川汁(サンマのつみれ汁)、ホタテの浜焼き、南三陸シーフードカレー、ササニシキのおにぎり、サンマのかば焼き丼、わかめまんじゅう、わかめスープ、フカヒレスープ、十三浜茶碗蒸しなどが、参加者に無料で振舞われました。地域が一丸となったイベントだったと思います。

会場の石巻専修大学では、参加者だけではなく様々な方に楽しみを提供するためフードブースやステージイベントも用意されました。プロアスリートによるバイシクル講座や子供自転車教室、「ピカチュウと遊ぼう」など親子で楽しめるものでした。フードブースでは地元の食材が集められ、にぎわっていました。

会場で出会った初参加の方に、感想を聞くことができました。

「被災地に来るのは遠慮しがちになってしまっていたが、このようなイベントがあると被災地にも足が伸ばせるし、微力ながら復興の力にもなって、被災地の現状も自分の目で確かめる事が出来てとてもいい経験になった」「来年もあるならまた参加したい」「復興が進んでいる所とそうでない所の差が激しい」というお話でした。

被災地への訪問機会を提供し、復興の進捗を直接見ていただけたことは、収穫だと思います。被災地が忘れられないようメディアの注目を集める効果も大きいと思います。

今回このイベントに参加して感じた事は、「復興の支援をしたい」という方と「支援してくれてありがとう」と感謝したい方の想いが会場一つになっているということです。

(高橋賢臣)



石巻専修大学に集まったサイクリストたち